実践型地域研究ニューズレター no.45，2012 年 7 月

ざいちのち

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。

京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

曽我谷川を泳ぐ魚たち

亀岡フィールドステーション

私が想う植木屋さん

実政造園・京筏組メンバー　実政秀行

植木屋、庭師と言われて 21 年。まだまだ未熟な私ですが、私が想っている植木屋さんについて少し書こうと思います。

時代の流れで街から庭が減少し、ガレージや外溝（エクステリア）が増えました。管理にしても「植木が伸びて邪魔！」、「草が生えて邪魔！」などと言われるようになりました。苦言を言われる代表的な樹木が、日本人が愛している「桜」なのです。花が咲いている時は春が来たと喜ぶが、花が散った後は毛虫が付きやすい樹木のために嫌われ者になってしまいます。「落ち葉が少なく、虫が付かないで、水やりが楽で花が綺麗に咲く」。そんな植木が好まれています。そこには人と樹木が共に成長し記憶をのこしていく生き物としての植木の見方がなくなってきています。この現状に自分自身が出口の見えないトンネルにいる気分になっていました。そんなとき、亀岡市にある築 300 年以上の武家屋敷「へき亭」を紹介されました。当初は一人でぽちぽちやっている若造の植木屋は当然信用してもらえませんでした。そこで、私自身を知っていただくために、「この樹木の隠れ潜んでいる表情を感じて下さい」と一本の古木を剪定させてもらいました。

長い時を風雨に耐えしのんだ幹肌を見せるようにし、葉と葉が風に揺らぎ、枝と枝の間からは木漏れ日が差し込む様に整え、庭本来の楽しみ方を女将さんに伝えました。そして、少しずつ庭の改修、再生を進めて行くうちに、減少していく亀岡の風土や文化に興味を持ち始めました。女将さんから亀岡市文化資料館の黒川館長を紹介していただき、丹波国分寺跡、旧山陰古道（放置竹林内）を見学し説明を受けました。丹波国分寺跡で館長のお話しを聞いていると、ここには七重塔があり豪華な国分寺が建っていたのだと知りました。そのことを想像するとロマンを感じ、長い歴史の中で自然とくらしが作り上げた風景がそこにはあるという思いにかられました。

亀岡をもっと知るためには「まずは地域の取り組みに参加することから始めたらどうか。」と館長からアドバイスをいただき、『のどかめ親子の農作業でアユモドキ見守り隊』ならびに『京筏組』に参加するようになりました。天然記念物のアユモドキが減ってきたのは、亀岡特有の風土や文化が減ったのも一つの原因と考え、植木屋としてどんな事がワークショップで出来るか考えました。ゴミには土に還るモノと還らないモノの 2 種類あります。土に還るモノの 1 つとして放置竹林の竹を使い、てぼうきと竹トング（写真 2 参照）を親子で作ってもらいました。それらを使うたびにゴミやアユモドキ、亀岡のことを思い出す身近な道具になってほしいと伝えました。アユモドキの生態系を知ることで亀岡の忘れられてしまった暮らしや風景を掘り起こすことが本当は大切なんだということを伝えたいと思い、お手伝いしています。

写真 1　丹波国分寺跡

日々なにげない生活にある面白いところを見つけ出し、気づいてもらえるようにする生業（なりわい）が、本来の「植木屋さん」と私は思っています。今後ともご指導の程よろしくお願い致します。

写真 2　てぼうきと竹トング
てぼうきホームページ
http://www.tebouki.jp/

習慣化された寄合の大切さ

京都大学東南アジア研究所・生存基盤科学研究ユニット
安藤和雄

守山市美崎自治会の美崎地区の大川の環境改善と活用への取組は、2012年度で4年目を迎えた。今年度は一年間をかけて最終的に大川活用のための具体的なイメージ（大川の将来イメージ図「未来予想図」）の作成を目指す。この目的を実現していくために、以下の二つの新たな組織的試みがこの4月から始まった。

1．自治会の中に大川活用プロジェクトのさまざまな活動を話し合っていく大川委員会の設置
2．原則毎月最終火曜日の夜7時から9時に美崎自治会館での美崎寄合の開催

美崎寄合には、美崎自治会（大川委員会と自治会役員）、立命館守山中学校・高等学校SSH推進機構、守山市役所環境生活部環境政策課及び政策調整部みらい政策課、京都大学生存基盤科学研究ユニット（東南アジア研究所実践型地域研究推進室）のそれぞれの担当者が集まる。第1回目の4月24日には、自治会関係者11名、自治会外から5名が集まった。5月22日、6月26日にもそれぞれ開催された。みらい政策課が担当し毎回の議事録が作られている。

写真：第2回　美崎寄合
（2012年5月22日　美崎自治会館にて）

月に一度の寄合に関係者が集まり、その月までの活動を紹介し、翌月の活動予定を知らせ、意見交換をする。習慣化された人の集まりは、人々の間の意見や情報交換や共有化にはもっとも重要な「組織的活動」であるだろう。特にコミュニティー（自治会）の外部の者が参加する場合、月に一度とはいえ、定期的な寄合は外部と内部という集団意識の垣根を取り払うためにも有益である。それが自由な意見交換と発想を促す。

今年度、私は、野洲川の放水路が完成した1979年以前、大川が野洲川の支流（分流）であった時代の暮らしについてよく当時を知る美崎の住民の方々に聞き取りを行っている。寄合では、聞き取りで私自身が知らなかった事実や、興味をひいた内容について参加者の方々に尋ねている。私の聞き取りが契機となり、「当時の美崎」が掘り起こされ、大川活用の具体的なイメージづくりに役立てばと願っている。

5月22日の寄合では、明治41年に申請された「大字復旧請願書」の資料とともに美崎のYさん宅に保存されていた明治期の絵図を印刷して皆さんに配付した。それを受けて、6月26日にはNさんが大変保存状態のよい手書き彩色の「今浜新田　地券取調総絵巻図」（明治6年）を持参され、寄合で公開された（この絵図については守山市誌地理編資料古絵図に掲載されている）。また6月26日には、自治会長が中心となってすすめておられる美崎の古い写真の収集の一部が公開され、「当時の美崎」に話が弾んだ。現在の美崎自治会館近くで、野洲川の支流であった大川に木造の「流れ橋」である大川橋がかけられていたこと、「流れ橋」は大水の時には板がはずされたこと、大川と新川に挟まれた地帯は桑畑であったことなどの話で盛りあがった。7月8日に自治会が開催した「さわやかサロン」では、収集された美崎の古い写真が、集まってもらった70代の美崎の女性の方々約20名にパワーポイントで公開され、意見交換がなされた。大川橋の写真、洪水の被害を受けて、村人総出で修復作業にあたっている写真などなど、参加者の皆さんは食い入るように、「当時の美崎」の風景を見ていた。

写真：美崎の「流れ橋」の大川橋（美崎自治会提供）

私が月に一度の定期的な習慣化された寄合の重要さを認識したのは、バングラデシュのタンガイル県ドッキンチャムリア村の小規模農村開発事業にJICAの専門家として参加した時であった。1993年頃のことである。住民参加によってこの事業を実施することが求められ、私は日本の自治会をイメージし、在村リーダーたちに、新しく組織をつくるというよりは既存の村がもっている地縁・血縁を土台とする地域社会のネットワークと相互扶助の精神が生かされる組織をつくってはどうかという相談を持ちかけた。その結果、伝統的な村での物事の決め方であった村総会を開催し、在村リーダーたち15名前後をメンバーとした村落開発委員会がたちあがった。月一回の定例会議とし、はじめの2年間は地方行政関係者を招いて開催された。その後、行政関係者はレギュラーのメンバーではなく、必要に応じて参加するようになった。JICAのプロジェクトは2010年頃まで断続的に村でも実施された。プロジェクトが実施されていない期間、そして終了後の現在もこの月例の村落開発委員会の会議は、村に設立されているNGOの事務運営のサポートを受けながら続いている。ほぼ20年が経過し、毎月々の議事録が取られている。

地域に暮らしているという実体を重視した自治会のような村組織は、当時のバングラデシュの農村開発アプローチではその必要性をまったく意識されていなかった。当時のバングラデシュの農村開発では、多様な社会経済的背景をもつ村人は、協力し合う存在ではなく、経

（次ページ下に続きます）

びわ湖畔の雑木山を「くらしの森」に ～木山からの出発

朽木 FS　今北哲也

火入れ手段による「くらしの森」への入り口となるのが「木山」である。朽木 FS の活動としてこれまで関わってきた湖西（椋川）、湖北（余呉）の山野の姿は遊休農地、草地、原野であった。未だ手掛けていないのが木山である。

堺木（さかいぎ）の前で立会い人の地元の方らと

縁あって、同じ湖北の木之本で民有林の手入れを私が任されることになった。私が雑木山に強い関心を抱いて来たことを考慮していただけたのか、「家産として受け継いできた『私』の山ではあるけれど『社会化』できれば面白いのではないか」というのが山主さんの考えであった。私にとっても異存はなかった。現場は民有林とはいえ、琵琶湖国定公園区域に入っている。景観にも配慮した雑木山の再生事例としてどんな手の入れ方がよいのか、具体的に考え実行する機会を与えてもらったのだと解釈した。

任された木山は湖の形が大きく出入りしている琵琶湖北部の飯浦（はんのうら）集落地先にあって、目の前に湖が広がっている。まわり一帯の山がそうであるようにクヌギ、コナラの雑木林である。

6 月、山の境界確認のため隣接地の地権者代表（18 名の共有山）に立会ってもらった。その時の一服話である。

「（薪炭の時代が終って以来）山へわざわざ入るんは自家用のシイタケ原木欲しさに伐りに入る私ら年寄りくらいや。若いもんは殆んど入らん」。

「（数十年前は）薪やら炭が売れたもんで飯浦でも薪づくりで山がにぎおうたもんや。薪は塩津まで運んだ。親の尻についてこの山にも何べんもあがって来たわ」、と代表は懐かしそうであった。

伐採後数十年経つと、二次林といっても見上げるばかりの伸びで、目通り直径（目の高さの幹径）は尺（約 30㎝）をゆうに越える。伐採手間が掛かるばかりか、薪や炭の用途なら割るのがまた一苦労である。また、材質の方は樹齢が重なると軟らかくなるとされる。

兵庫の猪名川上流の菊炭（茶湯用）産地、一庫（いちのくら）を訪ねたことがある。

短伐期のサイクルを繰り返し、幹や枝を炭にしてきた集落である。硬さも含め、黒炭で世界最高の品質とされる。

猪名川下流の池田は昔から造園樹木・苗の産地であり、そこで育てられたクヌギ苗が炭山に植えられる。20 年を目途に伐採され、炭に焼かれる。伐採後、素性の良いひこばえが育てられる。最初の伐採で萌芽の「台」が出来、二代目は 15 年で立派な炭木になる。太らせないことで炭質も維持されてきた。茶湯炭や備長炭あるいは岩手木炭等の有名産地はともかく、日本の山々では現在炭、薪をつくらなくなった地域が普通である。こうした地域では過熟（年輪を重ねた）な大径の樹木を相手にする他ない。炭つくりの例でも明らかなようにこのような山を先ずは一度若返らすことが必要だろう。

景観配慮も含めた山づくりの全体像は施業を終えた時点で報告する。現段階では、すぐに取り組まなくてはならない伐倒木の始末の仕方について書いておきたい。

伐倒された材は用途によって分けられる。大径材は割り、移動式鉄窯で現地で炭化する、あるいは薪にする。中径材は茸菌をまわし榾化して現地林間に伏せる。細木、枝葉はドラム缶を縦に半切りした伏せ焼き方式のバイオ炭化器で炭化する。この炭化作業により伐開林床が同時に焼ける。林床の炭と灰はその場で活かし野菜の種を播く。この簡易な方式を虫害でそのままになった昨年の中河内の未利用焼き畑跡でも応用する考えである。

木山から出発する山の若返りに景観要素を加えた実践事例として提案していきたい。

（前ページからの続き）

済的、社会的な階層によって反目する存在と規定されていた。反目しあっていては力が発揮できない。村にはリーダーたちが存在し、人々は村という名で相互扶助機能をもつ「社会集団」をつくっている。それが仮に崩れようとしていても、地域の再生は、そこから考えなければならない。この当たり前のことが、農村開発の専門家や政府の関係者には認知されていなかったのである。

「無縁社会」がキーワードとなりつつある現在の日本は、当時のバングラデシュとは状況は異なるが「地域とは何か」に関してしっかりとした哲学が地域再生や農村開発に関係する人々に求められていると言えるのではなかろうか。現在具体的な地域再生のイメージが私にあるわけではない。手探り状態である。ただし気持ちの変化を自覚している。一ヶ月に一度の美崎寄合と、自治会が行っている諸行事への参加により美崎へ通うことで、美崎が精神的にも私の暮らしの一つの場所となりつつある。習慣になっていくことの効用がここにある。

催しのご案内

■京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業　第 48 回　実践型地域研究　定例研究会
1.　日時　2012 年 7 月 27 日（金）　17：00 ～ 19：00
2.　場所　「もやいネット交流空間」
守山駅前　コスモ守山５番館
守山市勝部 1 丁目 16 － 27
3.　① 守山 FS 地域再生モデルの提案　―「ざいちのち」最終報告書を題材にして―　発表者：嶋田菜穂子、藤井美穂　安藤和雄
②コメント　高谷好一
③検討内容：
守山 FS では，守山市に伝わるフナすし、だるまそば、神社と人々の関係、地元の人々との寄合、開発集落での暮らしと農業に関する聞き取り、美崎地区での大川活用プロジェクトに FS のメンバーたちが参加してきた。それらをくくることのできるキーワードを探り，守山の地域性に根ざした地域再生のアプローチを考える。
★以上の催し物への参加ご希望の方は，
京都大学　東南アジア研究所　実践型地域研究推進室
担当：安藤和雄（ando@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

■「焼畑を活かした《くらしの森》づくり 2012」
1.　場所　滋賀県長浜市余呉町中河内（なかのかわち）集落の林野
2.　予定（天候により日程が動く可能性があります）
・伐開　第 1 回 7 月 19 日 [木]（雨天時は 20[金] に順延)
第 2 回 7 月 23 日 [月] (雨天時は 24[火] に順延)
・火入れ　8 月 11 日 [土] (雨天時は順延、日にち未定)
・播種　8 月 12 日 [日] (雨天時は順延、日にち未定)
・間引き　9 月初旬～下旬
・収穫　11 月初旬
3.　講師　永井邦太郎さん（摺墨山菜生産加工組合）、中河内集落の方々
4.　参加費
・昼食代：500 ～ 700 円（伐開・播種作業）
・交流会：2000 円（火入れ・収穫。地域の方々との交流会を予定）
・保険料：500 円（伐開作業・火入れ）
5.　集合　JR 余呉駅（北陸本線）に午前 9:10（駅から現地までは、車に乗り合わせて移動），車での現地集合も可。
6.　持ち物　軍手、作業に適した服装・靴、帽子、タオル、水筒、あればナタ、カマなど
7.　連絡先　朽木フィールドステーション世話役（増田）：
kamasu@cseas.kyoto-u.ac.jp
参加希望者は、各作業実施日の 2 日前までに、上記までメールでご連絡ください。1 日だけの参加も大歓迎です。

事業所での健康診断から垣間見えたこと

おおり医院 勤務医師
京都大学東南アジア研究所 特任研究員
分部 敏

病院の勤務医を辞し、4 月から事業所の定期健康診断の業務に携わっております。総勢 8 人程のメンバーで検診車に乗って事業所を訪れ、身長・体重・腹囲の測定、視力測定、聴力検査、血液検査、胸部Ｘ線撮影、心電図検査などとともに診察を行います。医師は私一人のことが多く、手短に問診・診察を行います。事業所は工場だけでなく、働く人がいるところはどこでも行きます。規模は大きなところは 300 人以上、小さいところは 10 人程度です。

職種は工員さんから事務職員、いわゆるブルーカラーからホワイトカラー、学校では教員から事務職、製造業、サービス業、土建業など、また外国人も含めてで、診察を通じて様々な働く人たちの話を聞くことができました。

健康診断ですから、病院で出会う患者さんとは違う健康な人たちです。1 日に 100 人以上、1 人当たり 20 秒から 1 分程度の短い時間の診察でしたが、貴重な体験でした。診察では、今までの病歴を確認し、現在は病気の症状が無いかを聞き、身体の診察をします。当日に結果が出る尿検査や心電図検査で、異常値・異常所見があった場合はその場で説明をします。また、必要に応じて簡単な保健指導をします。

今までいろいろな事業所をまわり、大勢の人に会いました。職種は様々でしたが、外国人を含めて、皆、律儀であり、礼儀正しく、仕事や人生に対して積極的な印象を受けました。個々の人からは断片的な話しか聞けませんが、それをつなぎ合わせると、その人たちの人生の一部が垣間見え、日本社会の現実の一部が見えてきた気がしました。

横浜の食品製造事業所では、夕方の 5 時からの健診が始まり、従業員のほとんどが外国人でした。毎日が夜勤だそうです。そこではコンビニ弁当を製造しています。外国人が働いているその工場は、衛生管理が工場の入口からすでに行き届いていました。入口で靴を脱ぎ、帽子をかぶることから始まります。上司らしい日本人社員が、外国人社員に気遣って声をかけている姿がありました。私たちが日頃お世話になっている安価な弁当は、外国人の手によって作られていることを知りました。

長野県での業務にも、何度か加わりました。健診車に乗って長野市と近郊にある事業所で、主に工場を回りました。山間の開けた平地には集落や市街地があります。今でも水田や果樹、畑作がされており、その中に工場があります。山間地では長い年月の間、農業が中心の産業構造であったのでしょう。工場は中心市街地や、鉄道線からは離れています。近年、道路や交通事情が良くなって工場が建ち、近郊からも通勤して来るようになってきていると想像されます。海外との競争のためかと考えますが、外国人の従業員もいました。また、道路が整備されており、山間部から街にマイカーで勤めに出ている人も多いようです。

健康診断では体を張って働いている人たちに多く出会いました。日本人、外国人を問わず、礼儀正しく、すがすがしい人たちでした。このような人たちによって日本が支えられていると思います。

発行：〒 606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集：安藤和雄・鈴木玲治・小野寺佑紀